

雨の神話

—— 恵みの雨、滅びの雨

一角仙人

能に「一角仙人」があります。こんな話です。

むかし、天竺のハラナ国に、額に一本の角を持つ男がいました。男はおそろしい神通力を持っていました。あるとき男は雨を司る龍神たちと争い、龍神たちを岩屋の中に封じ込めてしまいました。そのためハラナ国では一滴も雨が降らなくなり、みな困り果ててしまいました。

国王は男の神通力を奪うため、一人の女人を遣わすことにしました。美しく聡明なセンダ夫人が選ばれました。夫人は岩屋に住む一角仙人のもとを訪ねると、酒を飲ませたり、舞を舞ったりして仙人を酔い潰してしまいました。仙人は神通力を滅じ、封じ込めていた龍神たちは岩屋からでてきて、ハラナの国中に思うさま雨を降らせたのでした。

龍神が閉じ込められてしまったので、龍神が司る雨も閉じ込められてしまったのですね。竜蛇は神話では「水のもの」とされており、このように雨を司ること

世界をつるおす恵みの雨

神話学者 沖田瑞穂

雨の日。わたしは嫌いではありません。自宅でゆったりくつろぎながら、しとしと降る雨の音を聞くのは、むしろ好きです。みなさんは、いかがですか？

さて、世界各地に雨の神話がありますが、ここでは二通りに分けてご紹介したいと思います。「世界をつるおす恵みの雨」の話と、「世界を滅ぼす破壊の雨」の話です。

まずは、うるおす雨の話からみていくことにしましょう。

が多いのです。

岩屋に龍神が閉じ込められてしまったので雨が降らなくなった、というところは、日本の神話で、太陽の女神アマテラスが岩屋に籠もってしまったので世界が真っ暗闇になった、という話と似ているところがあります。神が岩屋に閉じこもったり閉じ込められたりすると、その神の力が世界に及ばなくなるといえることですね。

さてこの「一角仙人」の話は、舞台がインドであることから分かるように、インドの神話がもとになっています。リシュヤシュリンガ、すなわち「鹿の角」の仙人の話です。その話は、インドの二大叙事詩の一つ『マハーバーラタ』ではこのように語られています。

リシュヤシュリンガ仙

ヴィバーンダカという力のある聖仙（リシ）がおりました。大苦行をおこなって、神々にも尊敬されていました。あるとき彼が水浴をしていると、美しい天女のウルヴァシーが彼の近くに舞い降りてきました。その姿を見たヴィバーンダカ仙は、思わず精液をこぼしました。そこに喉を渴かせた雌鹿がいて、その精液を

水と一緒に飲んで、妊娠しました。

やがてその雌鹿から、ヴィバーンダカ仙の息子が誕生しました。その子の頭には一本の鹿の角が生えていたので、リシュヤシュリンガと名づけられました。彼は森で父に育てられ、父の他に人を見たことがありませんでした。

その頃、アンガという国のローマパーダ王は、きまぐれからバラモンたちに対して嘘をつきました。それで王はバラモンたちに見捨てられ、祭式を執り行つてくれる者がいなくなったので、インドラ神は王の国土に雨を降らせることをやめてしまいました。国民はたいへん苦しみました。国王と賢者たちは議論した末、森に住むリシュヤシュリンガ仙をアンガ国に連れてくることにしました。その偉大な苦行者が領地に入れば、雨神インドラはただちに雨を降らせてくれるだろうと考えたのです。

王は大臣たちと相談して、遊女たちをリシュヤシュリンガ仙のもとに遣わすことにしました。

遊女たちはヴィバーンダカ仙の不在をねらって、リシュヤシュリンガ仙のもとに挨拶をしに行きました。聖仙ははじめてみる「女」に驚きつつも挨拶を返し、